

山梨県 大月市

**岩殿中倉遺跡発掘調査報告**

1974年3月

大月市教育委員会

山梨県大月市

**岩殿中倉遺跡発掘調査報告**

## 卷頭言

大月市教育長

藤本三郎

地域開発と文化財保護の接点が取りあげられてからすでに久しく、本地域も首都圏のネットがかぶせられてから、開発は次第に顕在化し、その変化はめざましいものがあります。

このたび住宅供給の要請により岩殿地区の中倉一帯が住宅団地として、開発が計画されました。中倉一帯は、古くより埋蔵文化財の包蔵地域として、価値が論じられ注目されたところで、そのため、昭和46年より文化財保護と開発について時間をかけて検討し、予備調査を行い、昭和48年に結論として記録保存することが適切とされ、発掘調査を行うことになりました。

発掘に当っては、県教育委員会の助言と、県遺跡調査員の指導のもと、かつて県住宅公社のご協力をいただきました。調査は郡内地区の埋蔵文化財関係者の、地域の解明は、われわれの手でのスローガンのもとに進められ予期以上の成果を収めることが出来ました。本調査により岩殿中倉遺跡の価値が再認識され、その上大月市原史時代文明に寄与したことは誠に欣快にたえぬところでございます。

さらに関係者各位のご尽力により調査報告書を刊行し、その成果の一端を広く発表する次第でございます。

## 例　　言

1. 本報告書は、岩殿遺跡発掘調査団が行なった大月市賀間町岩殿中倉遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、山梨県住宅供給公社が、大月市教育委員会に委託したものであり、金田頼貞、川崎義雄が担当した。
3. 発掘調査には、主として県立都留高校、地元中学校などの生徒が中心となった。参加者名は巻末に銘記した。
4. 出土品の整理は、担当者の指導で、発掘参加者が行なった。
5. 本書の執筆には、金田頼貞、池田敏雄、川崎義雄、重住　豊、伊藤光則、出中純男が分担し、川崎義雄が文章の加除筆、統一および編集にあたった。誤りがあれば、責任はすべて川崎義雄にある。

## 目 次

卷頭言 .....	2
例 言 .....	3
1. はじめに .....	5
2. 自然環境 .....	6
3. 発掘経過 .....	8
4. 遺 構 .....	10
5. 出土遺物 .....	12
A. 土 器 .....	12
B. 石 器 .....	14
6. ま と め .....	18
7. おわりに .....	19
8. 参考文献 .....	20
参加者名簿 .....	卷末

## 図 版 目 次

図版1.	遺跡の遺景、発掘風景
図版2.	第1号小竪穴、第2号小竪穴
図版3.	第2号小竪穴発掘風景、測量風景、第3号小竪穴、第4号小竪穴
図版4.	出土土器
図版5.	出土土器
図版6.	出土土器
図版7.	出土石器
図版8.	出土石器
図版9.	出土石器
図版10.	出土石器

## 1. はじめに（発掘調査までの経緯）

本遺跡は、かつて仁科義男氏が「甲斐の先史並に原史時代の調査」の中で、賑岡村（現在賑岡町）アプロースをとりあげ、土器、石棒、石皿、石鎌などの出土品について記述した。部落民は、この付近より、耕作中などに黒曜石などを発見し、この地に興味をいだいていた。とりわけ桂川第四紀研究会の鈴木武雄氏によるたび重なる丹念な採集は、この遺跡を掌握するに、多く貢献してくれた。また昭和38年度遺跡分布調査の折りにも再確認されて報告された。

たまたま昭和46年、この地域一帯の開発が計画され、山梨県住宅供給公社によって、分譲住宅団地（岩殿団地）として、遺跡の一部もその開発の対象となり、買収されることになった。そこで大月市教育委員会では、山梨県教育委員会の助言と指導により、小林達雄（現文化庁記念物課）氏を招いて、予備調査を依頼した。

小林達雄氏は石器、特に黒曜石類の出土の多いこと、貝殻条痕文などの土器の出土状況などからみて、遺跡は縄文時代前期から、あるいは早期末に遡るものと考え、その調査の必要性を示唆し、その第一次発掘調査費も見積られた。市、県においては、住宅供給公社に発掘調査費の支出（負担）を要請したが、らちがあかぬまま遺物包含地は緑地（公園）として残す方法などの検討で、しばらくの日時を要した。また住宅供給公社も住宅地として開発する必要性と文化財保護の対策として記録保存を図ることになった。そこで昭和48年発掘調査を、山梨県遺跡調査団に依頼し、その資金の提出についても積極的に援助することになった。

さらに山梨県遺跡調査団は、大月市教育委員会に対し調査を依託した。大月市教育委員会では、これを受諾し、文化財審議委員会に諮り、調査団を発足させるとともに、岩殿遺跡調査協力会も発足し、態勢が整えられ、昭和48年8月、発掘調査の運びとなった。

なお、発掘調査にあたり、次のとおり、岩殿遺跡発掘調査團が編成された。

団長：金田頼貞

顧問：大沢良作（大月市教育委員長）

佐藤威夫（大月市文化財審議委員長）

調査員：池田敏雄 石井深

大野四郎 奥隆行

金森辰政 川崎義雄

小林岳 小林利久

佐藤禪光 重住豊

鈴木武雄 中村嘉子

羽田貞義 矢崎勉

（金田頼貞）

## 2. 自然環境

岩殿山のトンネルをぬけ、左側へカーブをとるころ、前方の一段低いところに沖積地がひろがる。遺跡はその沖積地の大月市駒岡町岩殿字中倉地内に位置する。

岩殿山をかこんで北側から葛野川、南側には桂川が東流し、「さるはし」の付近で合流し、相模湖へと向かっている。

つまり岩殿山は、両河川にはきまれた丘陵の東端にあたるわけで、かつて小山田氏居城地の岩殿城はこの山頂付近に構築されていたことは、あらためてのべることもないであろう。

桂川にそそぐ葛野川は、この付近では流れをゆるやかにし、わりと広大な河岸段丘をつくっている。そのうえに、現在葛野、畠倉、岩殿の各集落は立地している。そのことから葛野川のこのあたりは、桂川の支谷にあたることからも、それらは谷口集落ともいえるだろう。

遺跡は葛野川の右岸の比較的ゆるやかな段丘上から急傾斜地にうつる現標高363 m の地点に位置し、その範囲はかなり広大にみられる。

遺跡の南西側には岩殿山（標高675 m）がたちふさがり、日照条件は、必ずしもよいとはいえないところで、比較差300 m あまりは、冬では日没が著しいであろう。しかも葛野川の中位段丘でもあり、水利にきほどめぐまれていたとも考えられない。さらに土壤も礫をきわめて多く含み、礫層といつてもよい褐色土層が覆い、従来考えられていた遺跡立地としても、恰好の場所とはいえない。

周辺の近接した遺跡には、桂川、葛野川両河川の両河岸段丘に立地し、しかも左岸、右岸に限らず、まんべんなく分布しているようである（大月市史編纂室作成——時代的に分類し、同時性を把握できるならば、各時期の土地利用、あるいはその相互関係などが明確にできるであろう。今後の研究に期待したい。）。そのうち石器時代では、主として中期縄文時代（勝坂式～加曾利E式）が多く確認されているようであるが、集落遺跡は桂川右岸に集中しているようである。県立都留高校校庭、高月橋周辺の遺跡などは、その好例である。前者は現在同校校庭に中心地があつたらしく、かつての採集品から勝坂式、加曾利E式、称名寺式、堀之内式などの各時代の遺物が多数発見されているが、今はその全貌を知ることはできない。

それに対して葛野川流域の遺跡にはさほど大きなものはみあたらず、むしろ小さなものが多く目立つ。その点で、両河川流域の各遺跡の相互関係が今後に残された研究課題のひとつであろう。

以上縄文時代中期の遺跡が大多数をしめるが、それ以外の時代は遺跡の存在すら不明瞭なことが多く明確にはできない。そのことからも今回のこの発掘調査は、この地域のみならず、郡内地域の早期縄文時代の一資料として、今後の研究の参考となるであろう。（池田 敏雄）



図1 遺跡付近地形図(●印:遺跡遺跡)(○印:周辺の遺跡)

### 3. 発掘経過

今回の遺跡発掘区域となっている地点の西側大部分が住宅建設予定地であるためにその地堅めとしてすでに大量のパラス、コンクリート・ブロックなどが散在的に敷きつめられており、遺跡東側部分に集中せざるを得なかった。

このような状況ではあったが、西側地区での発掘はグリッドによって、発掘可能な主要地点を重点的に行なうため、道路敷設地を境にして、1区2区……と15区まで道路に沿ってA区～J区までそれぞれ設定することとした。

しかし、西側に設定したグリッドでは、A-1, C-8, F-1各区で若干の土器、石器が出土しただけで、ほかの区では、ほとんど遺物は出土しなかった。H-8区において石鎚、スクレーパー、黒曜石フレイクが多量に出土したこと、グリッド南側に遺構らしき落ちこみを確認したこと。H-9, 1-8・9区の発掘を試み、階円形プランをした小堅穴遺構を確認することができた。

このように遺跡の西側は発掘するに際し、非常に困難なことと、遺物の出土がほとんどみられないことなどから、グリッドを、さらに東側に延長することにし、A-1区の東側に101～111区を、南側にはA～M区まで延長設定した（図2参照）。

その結果、A-105・106区において縄文時代早期に比定される貝殻条痕文の土器片と、グリッド北側に落ちこみが確認されたため、さらに北側に拡張する必要性が生じた。しかし、隣接地が桑畠であり、拡張は不可能であろうと思われたが、地主の小保氏の好意によりX-105・106, Y-105・106の4グリッドの拡張区を設定し、発掘可能となった。

その結果、縄文時代早期に比定される土器と、打製石斧、礫器、スクレーパーなどの石器が出土し、A-105・106区において確認された落ちこみは、南西側にステップ状の張り出しをもち、西北側外部には約10cmの厚さで堆積された焼土を有する屋外炉をもつ小堅穴遺構であることが明確にされた。

さらに、発掘区の関係で発掘することは不可能であったが小堅穴の北西側、北東側にそれ

ぞれ一基ずつ、階円形をした土塙状遺構が二基発見された。また、南東側には1個の小ピットが発見されたが、小堅穴と何らかの関連性があると思われるが明確にはできない。

このように、今回の発掘で、合計四基の小堅穴が発掘された。発掘前半は天気に恵んでいたが、主力が西側に集中していたこと、後



半の東側に移った時点から連日雨中での作業であり、非常に困難な作業であったため、桑畠の拡張区の埋めもどし作業を2日間オーバーせざるを得なかった。  
（重住 豊）

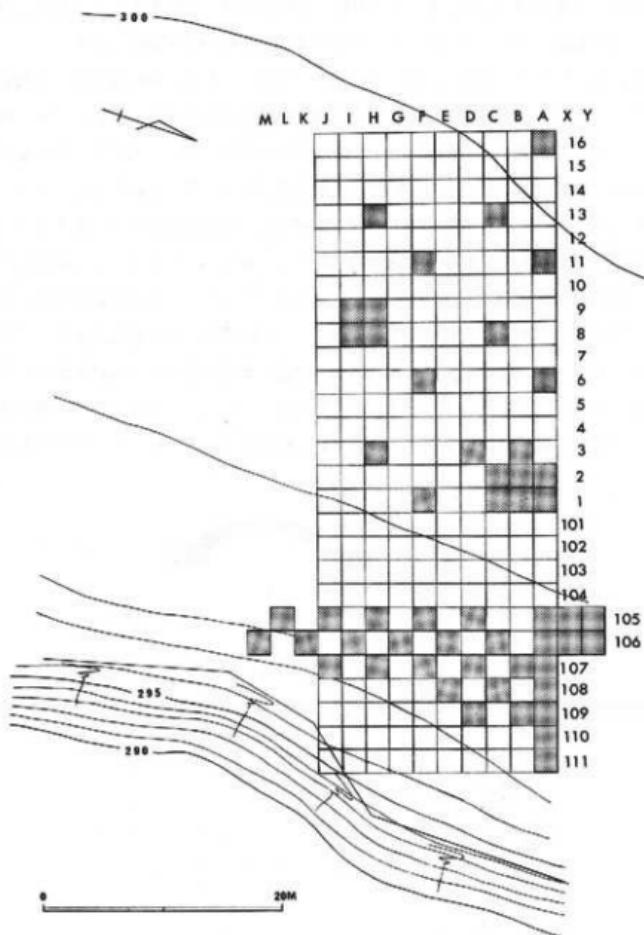


図2 発掘区（ドット内発掘）

## 4. 遺構

今回の発掘によって確認された遺構は、小堅穴といえる遺構で、H, I ~ 8, 9の4グリッドにまたがって第1号が、A, X, Y~105, 106のグリッドに集中して3基（2号~4号）がそれぞれ確認された。そこで、それぞれの小堅穴について記述してみた。

第1号は、H, I ~ 8, 9の4グリッドの中心に位置しており、長軸230 cm, 短軸144 cmの橢円形プランを示している。また、長軸は東西、短軸は南北方向と一致している。遺構は、砂礫やスコリアを含む黄褐色土層を、深さ約50cm程度掘り込んでいるもので、底面は長軸の北側に片寄り、船底形をなしている。付近の土壤堆積状態は、大きく3層に分かれる。第1層は本遺跡では一般的に見ることができる層で、礫を含む黒色土層である。第3層は、若干粘性がある褐色土層であり、堆積した礫がブロック状に見られ、スコリアを小量含んでいる。第6層は発掘された最下層で、その説明は前記した通りである。以上が総体的な3層である。また、4, 5層は覆土と思われる土層である。4層は粘性のない褐色土層で、やはり礫の混入が見られる。5層は若干粘性が認められる褐色土層で、含まれる礫は他層と比較して細粒である。第2層の構成要因は1層とほとんどかわらないが、やや礫が多く土壤が流出したものかとも思われる。なお、本堅穴下底面より、石鏃2点、スクレーパー1点が出土している。

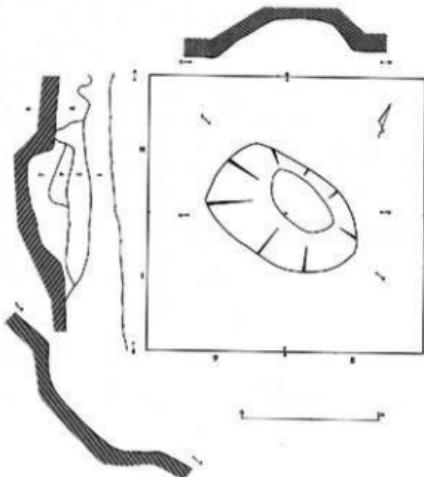


図3 第1号小堅穴実測図

第2号は、ほぼ円形プランをなし、南西側に「張り出し」を持つもので、長軸は、北東一南西方向に226cm、短軸は、北西一南東方向に190cmを数えることができる。また、壁高は北西側で40cm、南東側で35cmである。

第3号はY-105グリッドにおいて確認されたもので、全体のプランは確認されないままに調査を終了せざるをえなかった。推定できるプランは、小判形をなすものと考えられ、確認できる部分で測定した長軸は、東西に約940cm、短軸は南北に約80cmである。底面形はフラットであり、壁高は約38cmである。

第4号は、X-106グリッドで確認され、3号と同様に全体のプランは確認されていない。推定プランは、やはり3号と同様に小判形をなすものと思われ、確認された部分の長軸は東西に140cm、短軸は南北に72cmを数えることができる。底面形は、やはりフラットであるが、全体的に角ばった感じがする。壁高は約32cmである。

さらに、2号と3号の間で2号寄りに炉址が確認されている。炉址は、径が約64cmのほぼ円形をなし、焼土が約10cmかなり固くしまった状態で堆積していた。

また、ピットは、ほぼ円形のもので、2号から南東方向に約98cm離れた地点で1個確認されるのみであった。

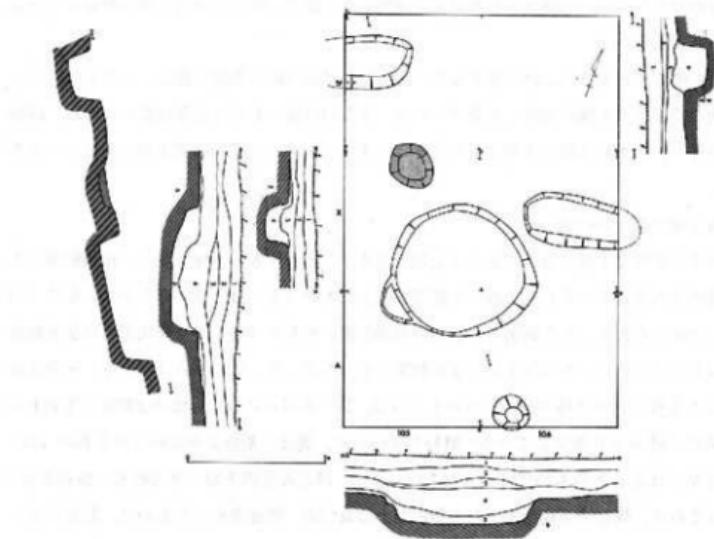


図4 第2～4号小堅穴実測図

これらの遺構付近の土壤堆積状態を述べると、やはり表土より発掘面までおよそ3層に分かれているが、遺構下底面ないしは遺構が切り込んでいる土層が、ソフトロームであるという点が、第1号付近の土層状態と若干異なっている。

(田中 純男)

## 5. 出土遺物

### A. 土器(図5)

本遺跡から出土した土器は、層位的な出土は見られず、包含層も薄く、分層発掘はできなかった。しかも量的に見ても多くはなく、復元可能な土器は認めることはできなかった。したがって出土地点からの若干の相違は認めることはできたものの、層位的な型式分類は不可能であった。しかしながら、文様の差異による分類は可能であると思われる。

以下分類してみる。

#### 第1類土器(1~3)

ヘラ状工具による沈線文と、貝殻腹縁文を主体とした土器である。口縁部にはヘラ状工具による刻みが認められ(1)。さらに口唇部には竹管状工具による刺突文が連続的に認められる(1, 2)。胎土中に比較的多くの長石を含んだり(1), 若干の雲母末を含んだりする(2)。焼成は良く、堅くしまっている。本類土器は、主要文様を貝殻腹縁文と沈線文と組み合わせたもので、口唇部にも刺突文を並列した土器で、田戸上層式土器に類似している。

#### 第2類土器(4)

胎土に纖維を若干含み、色は黒ずんでいる。地文に横方向の条線を施し、その上に「ハ」の字状の切り込みを横に連続して設けている。また口唇部にも切り込みは認められる。口縁部は外反し、あまり大形の土器ではなさそうである。おそらく子母口式土器に対比できるだろう。

#### 第3類土器(5~22)

いわゆる細線文土器に対比できる土器である。土器の厚さは一様でなく、比較的厚いものも認められる(5~7)。このうち刺突を施したもの(5~11)と、そうでないもの(12~22)に分けられる。また刺突も、貝殻の殻頂を用いたもの(5), 竹管状工具による刺突をもつもの(6)と、ヘラ状工具による刺突をもつもの(9, 11)に分けられる。そのほか竹管による格子状の文様が認められるもの(13, 14)もみられる。14はほぼ脇部と思われるところに、撲糸文を施している。磨耗しているが、裏面に条痕文が認められるもの(12)があるが、ほとんどのものにはみられない。また、ほとんどの土器に雲母粉末、長石などが含まれており、概して茶褐色をした土器の胎土は良いが、黒褐色をしたものは、器面がザラザラし、あまり良くない。本類土器は、伊豆、東海地方に広くみられる細線文指痕土器によく類似しているが、やや厚手であることで異なっている。

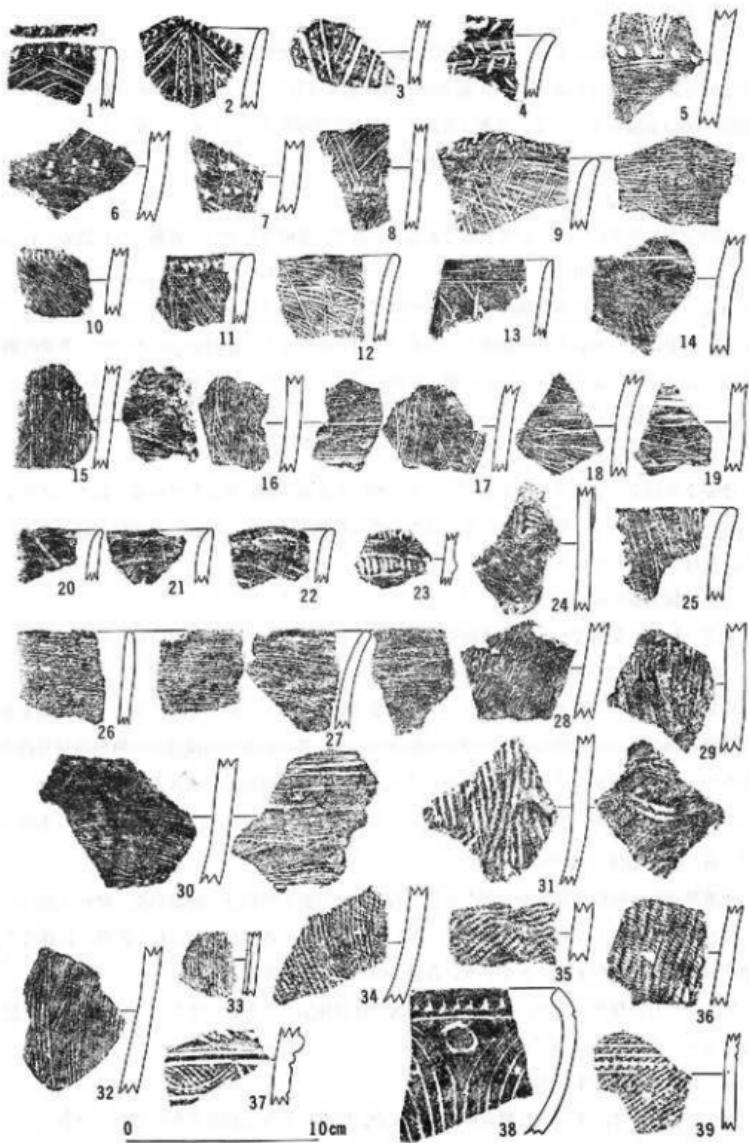


図5 出土石器

#### 第4類土器(23, 24)

隆起文の認められる土器である。23は、横方向に隆起文を設け、その上面にヘラ状工具による刻み目を施している。24は、縦方向に隆起文を設け、胎土には、若干の繊維が含まれ、胴部に細い条線がみられる。前者は黄褐色、後者は黒褐色をし、それぞれ堅くしまっている。いわゆる上ノ山式土器に類似するものである。

#### 第5類土器(25~32)

条痕文を主要文様としている土器である。このうち条痕文が土器の表裏ともに認められるもの(26, 27, 30, 31)と、土器の表面だけに認められるもの(25, 28, 29, 32)とに分けられる。条痕文は、貝殻の腹縁を利用したり、ヘラ状の施文具を利用したりして施文している。胎土中に比較的おおめの繊維を含むもの(31)もあるが、相対的にはきわめて微量の繊維を含んでいる。良く焼きしまり、堅い反面もろくこわれやすい。本類土器は、いわゆる茅山式土器に対比できるだろう。

#### 第6類土器(33, 34)

燃糸文を施文してある土器である。ともに燃糸文を縱方向に施文している。胎土には微量の雲母を含んでいる。堅くしまっているが、板状剥離が著しい(33)。34は底部付近と思われ、文様はつまっている。

#### 第7類土器(35, 36)

繩文(L R)を施文している土器で、胎土には雲母、長石を含み堅くしまっている。

#### 第8類土器(37~39)

中期繩文土器の一群を集めてみた。37は繩文を地文とし、さらにその上に2条の沈線文を弧線状に施している土器である。38は、胎土に石英を若干含み、口縁部に三角形の切り込みをもつ土器で、碗形をする土器と思われる。39は、胎土に雲母を少量含み、繩文を施文している。

(伊藤 光則)

### B. 石器(図6~図7)

本遺跡より今回の発掘において出土した石器類は打製石斧14点、礫器14点、磨石(鼓石として再使用されたものも含む)18点、スクレーパー(いわゆる石匙も含む)27点、石鏃27点、錐状石器1点に大別することができ、合計104点の出土をみた。

出土した石器類すべてが、発見された遺構に直接伴出したものではないが、ここでは一括して述べてみたい。

#### 1 石斧(図7-1~3)

出土した石斧は、すべて打製石斧ではあるが、明確に石斧と判別できるものは少なく、ほかは剥離面が残っているものの破損、風化などによって判断しにくいものもある。石質は1、3が安山岩、2が玄武岩である。

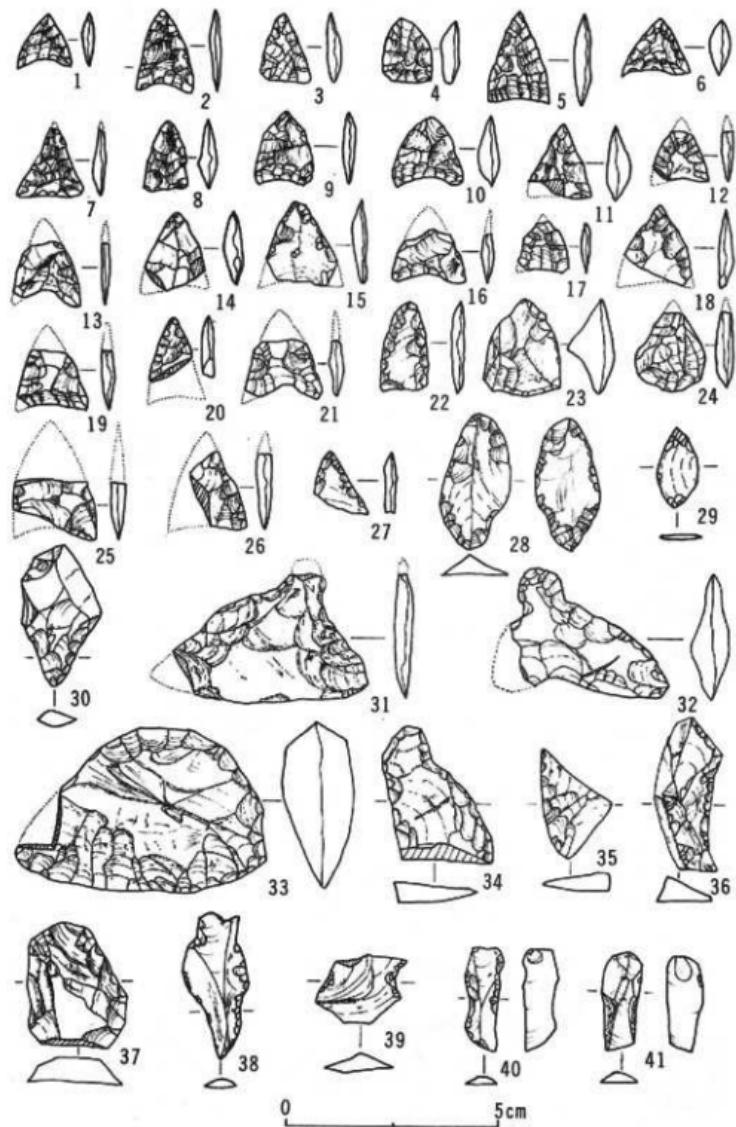


図6 出土石器(1)

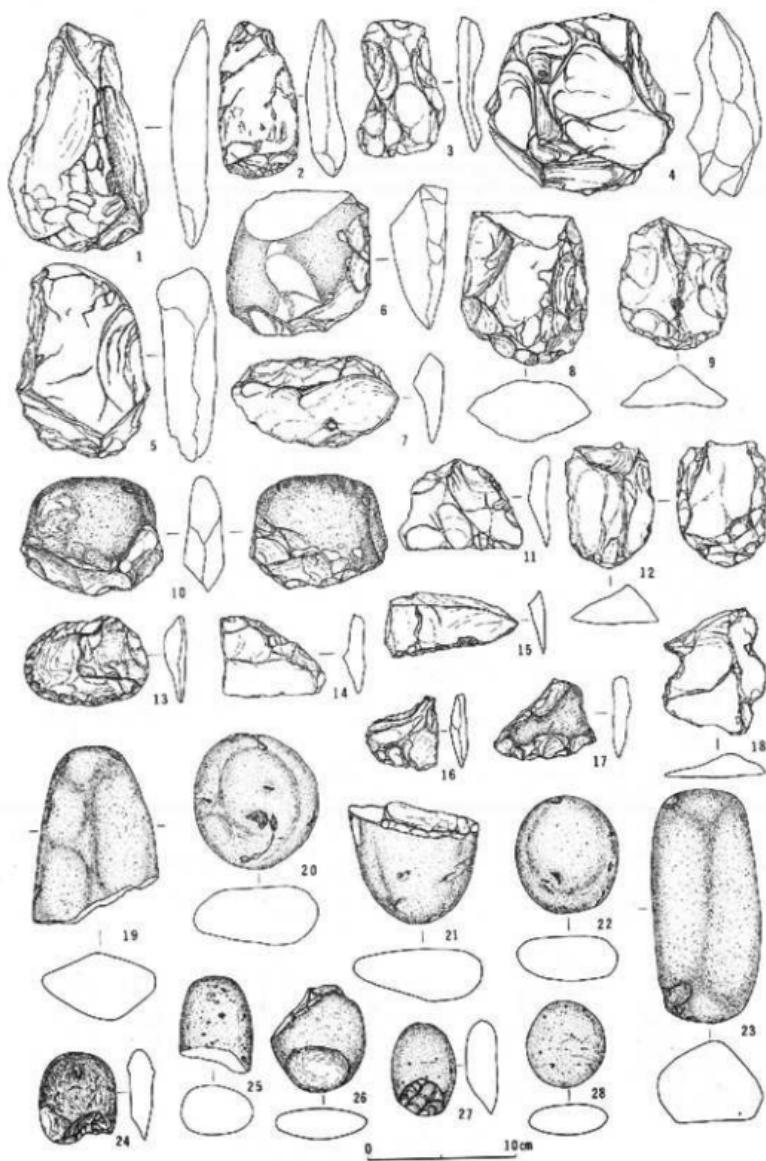


圖7 出土石器(2)

## 2 磨器（図7-4～6, 8～10, 12）

14点の出土があり、片刃（4, 5, 9）、両刃（6, 8, 10, 12）のものと二別することができ、さらに断面が三角形を呈するもの（9, 12）とがある。石質は4～6, 8, 9, 12が安山岩、10が玄武岩である。

## 3 スクレーパー（図6-28, 29, 31～38, 図7-7, 11, 13～18）

広義の意味でのスクレーパーであり、（図7-7, 14, 15）のように断面が三角形の剥片を用い、その一辺にのみ剥離を加え刃部を作りだしたもの、（図7-11）のように石材の周辺に剥離をめぐらしたもの、また、（図6-31, 32, 34）のように小形で、入念に剥離をくり返し、つまみと刃部を作りだしたもの、（図7-16～18）のようにつまみを有するが、荒い粗雑な剥離で刃部を作りだす、いわゆる石匙も含むこととした。（図6-28, 37）は搔器であろう。石質は7, 11, 13～18, 31が安山岩、28, 29, 35～38が黒曜石、32～34がチャートである。

## 4 磨石（図7-19～28）

出土した磨石はそのほとんどが再使用されており、19～21, 23が敲石に、24, 26, 27が小形のチョッパー状の石器として再使用されている。石質は19～21, 23が花崗岩、22が石英安山岩、24が安山岩、25が多孔質安山岩、26～28が砂岩である。

## 5 石鎌（図6-1～27）

石鎌は完形、破損したもの、表採したものを含め27点の出土であった。抉りを有するもの15点、ほとんど抉りがなくほぼ水平に近いもの6点、舌状に丸みを有するもの2点、破損し形態不明のもの4点であり、石質はすべて黒曜石である。

## 6 錐状石器（図6-30）

1点の出土であった。荒い剥片を使用したものと思われ、剥突部以外の部分にはほとんど手を加えておらず、剥片の比較的薄い部分にのみ両側面から剥離を加え剥突部を作りだしている。石質は赤色チャートである。

（重住 豊）

## 6. まとめ

発掘調査および出土遺物などについて、それぞれ記述してきたが、最後にそれらをまとめてみたい。

(遺構) は合せて4基、確認したが、まず3号、4号については、従来からいわれている土塙墓(墓塙)といえるだろう。残念ながら、それぞれ完掘こそできなかったが、ほぼ全容はわかるものと思われる。いずれも心もち隅の角ばった楕円形をし、ほぼ東西に長軸をもっている点で共通している。礫を含んだ褐色土層から掘り込み、ほぼローム層面で下底になっている。包含される土層は、粘性に乏しい褐色土層がマウンド状に覆っている。出土土器は、細片ながら茅山式土器が出土していることから、同時期に帰属できる。

1号についても、同様な形態をしているが、規模の点で大きな差があり、墓塙とするには不安がある。一基だけボツンと確認されただけでもあり、しかも中から多量の黒曜石フレイクと石器が出土した。そのことから、むしろ石器製造のための遺構と考えた方がよいかも知れない。しかし、石器製造のための台石などの出土はなかった。また土器の出土もなく時代的には明確にできない。それでも本遺跡の性格から、縄文時代早期末の遺構と考えられよう。

2号は、ほぼ円形をし、一方にステップ状のはり出しをもっている。下底面は平坦かつ、堅くしまっており、土層も一般的な住居跡と同様な堆積状況をしていることから、小形の住居跡と思われる。しかし柱穴は内部にはみられず、おそらく外部にあったと看取できる。また、炉跡はびっしりと焼土がつまり、いわゆる屋外炉になっている。しかし住居跡と同時期のものであるかははっきりできない。先述の土塙墓より古い時代のものと考えられる。住居跡からは、わずかであるが、第一類土器が出土したことから、その時代のものと思われる。

(土器) の出土量は、第3類土器が最も多く出土した。この種の土器は、伊豆、東海地方に中心地をもつ「縦線文指痕薄手土器」に対比できるであろう。しかし必ずしも薄手とはいせず、厚いものもある。木島遺跡のそれには縄文が見られないようであるが、本遺跡では見られる点で異なる。本類土器に伴出する埼玉、東京、神奈川方面でみられる前期初頭の繊維土器の出土は全く認められず、より伊豆方面との関連を深めていると考えられる。

先行する第4類、第5類土器はほぼ伴出関係にあるとみてよいだろう。前者は東海地方の上ノ山式土器、後者は関東地方の茅山上層式土器に含まれよう。

第1類土器は、田戸上層式土器、第2類土器は子母口式土器に、それぞれ対比できるであろう。

第6類、第7類土器は、いずれの型式に伴出するかははっきりしない。

第8類土器は中期初頭の五領台式土器と類似点を同じくしている。

(石器)は、粗雑な礫器が多く目立ち、縄文時代早期末の遺跡の特徴を物語っている。残念ながら、土器の出土状態も、層位的出土がなかったことから、石器の共伴関係は明確にできなかった。  
(川崎 義雄)

## 7. おわりに

以上、発掘調査の報告をのべてきたが、発掘資料の量はかならずしも多いとはいはず、整理は容易であったにもかかわらず、いがいと日数を要してしまった。

それというのも、縄文時代早期末の、この種の時代の調査に対して経験的に不足していたことだろう。

加えて、地域的なものも手伝って、あまりにも複雑な様相をしていることを意識していたこともあるだろう。

かって筆者らは、市史編纂室の小林利久氏の案内で、この遺跡を探訪したことがある。当時、宮谷白山遺跡の発掘調査後、この遺跡も次の発掘計画の対象にあるということを聞いていたから、その事前にということであった。

しかしその時、山梨県住宅供給公社による住宅建設のため、すでにブルドーザーで整地が進められ、遺物包含地周辺までおよんでいた。その際、A～B-1～2区付近で焼土痕を確認していたのであったが、残念ながら今回の調査ではすでに道路のため削平され、発掘で明確にすることはできなかった。

それでも発掘調査では、大小4基の小竪穴を確認することができた。

出土土器の出土量はあまり多くはなかったが、石器の出土量は大変多かった。とりわけ石鎚のそれは目立った。また筆者らの探訪の際にも、さらに鈴木武雄氏によるなが年の採集により、きわめて多くの石鎚が採集されており、その数は膨大になる。同氏による採集地点は、発掘地点の10mほど北側の桑畠地で、今回の発掘区でも遺構の確認も桑畠地にまでおよんでおり、遺物包含の中心地は発掘地区の北側隣接地であることは今回の発掘調査でも看取できる。すなわち発掘対象地区は遺跡の南端であったといえるだろう。

そのような状況にありながら、縄文時代早期という性格からしても、必ずしも遺物の出土量が少なかったとはいえないだろう。特に桑畠に近接したB～Y区に集中していた。そのことから造成の拡張があるならば、その対策を構じる必要がある。

この発掘調査が、限られた日数、予算などに制約をうけていたにもかかわらず、よい成果をおさめたうらには、多勢の人たちの快い協力があった。

宿舎、食堂になった大月自動車教習場の米山久五郎氏、また無理な願いや、突発的な希望

に対しても、快く協力を惜しまなかった教育委員会や関係各位をはじめ地域住民の方々に感謝するものである。予定発掘区域外の発掘地となった地主の小保晴信氏には特にお世話になった。そのほか、多勢の人たちから多大の差入があった。明記はできないが合せて感謝する次第である。

(川崎 義雄)

## 8. 参考文献

- 仁科義男(1935) ..... 「甲斐の先史並原史時代の調査」 甲斐資料集成12
- 赤星直忠(1935) ..... 「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」 史前学雑誌7-6
- 加藤明秀・芹沢長介(1936) ..... 「静岡県に於ける細線紋指痕薄手土器と其作出石器」 考古学7-9
- 吉田富夫・杉原莊介(1937) ..... 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究」 考古学8-10
- 河辺寿栄・佐藤民雄(1939) ..... 「伊豆伊東町上の坊石器時代遺跡調査報告」 考古学10-8
- 吉田格(1955) ..... 「千葉県城ノ台貝塚」 石器時代1
- 中山英司(1955) ..... 「入海貝塚」
- 岡本勇(1959) ..... 「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」 横須賀市博物館研究報告3
- 同(1962) ..... 「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)」 横須賀市博物館研究報告6
- 藤沢宗平(1969・1970) ..... 「長野県上伊那郡宮田村中越遺跡」



遺跡の遠景（岩殿山より）



発堀風景（D-105付近）



第1号 小竖穴



第2号 小竖穴



第2号 小豎穴発堀風景



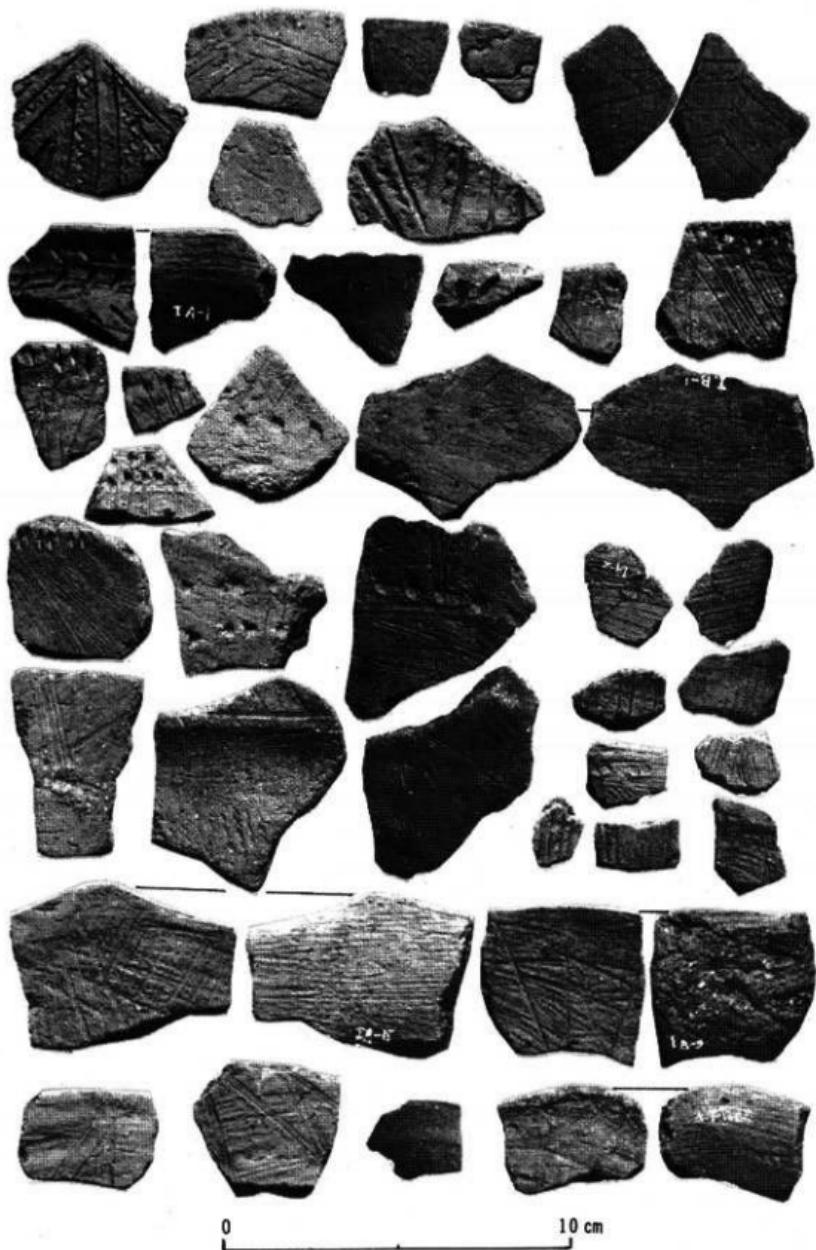
測量風景

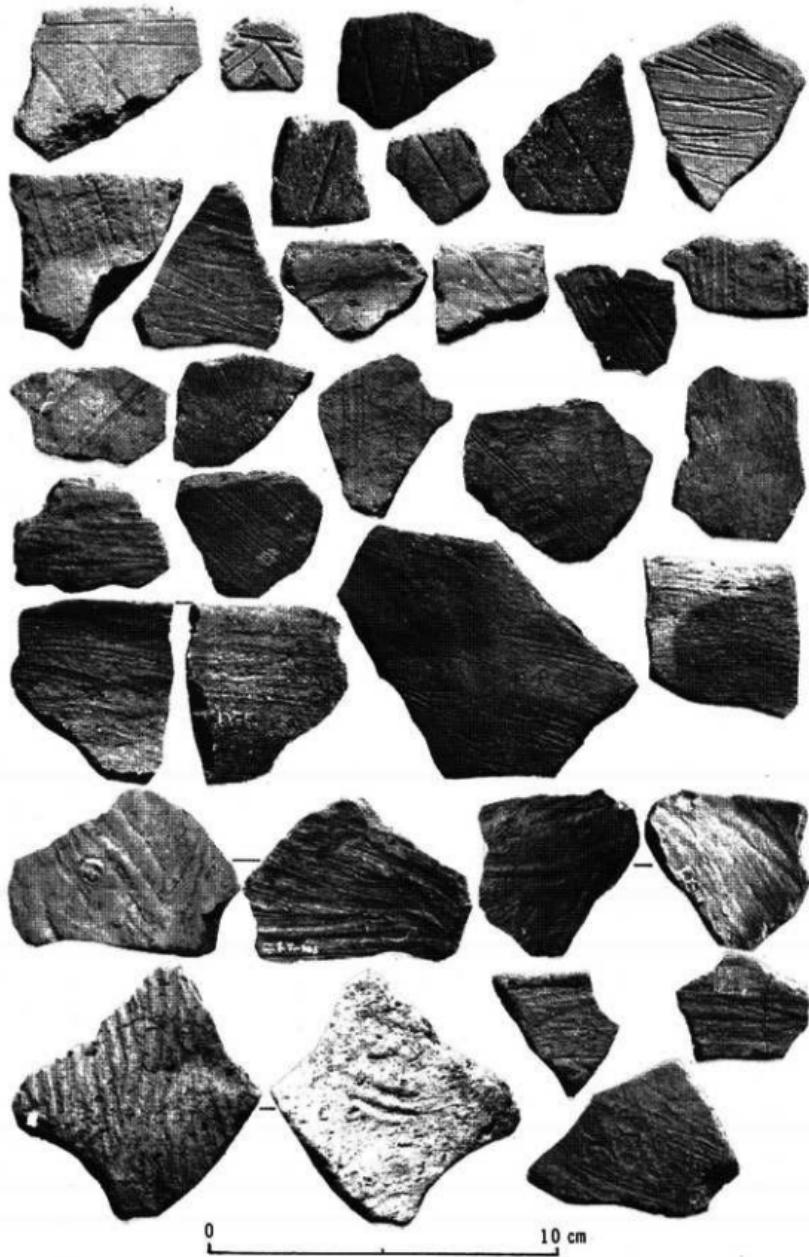


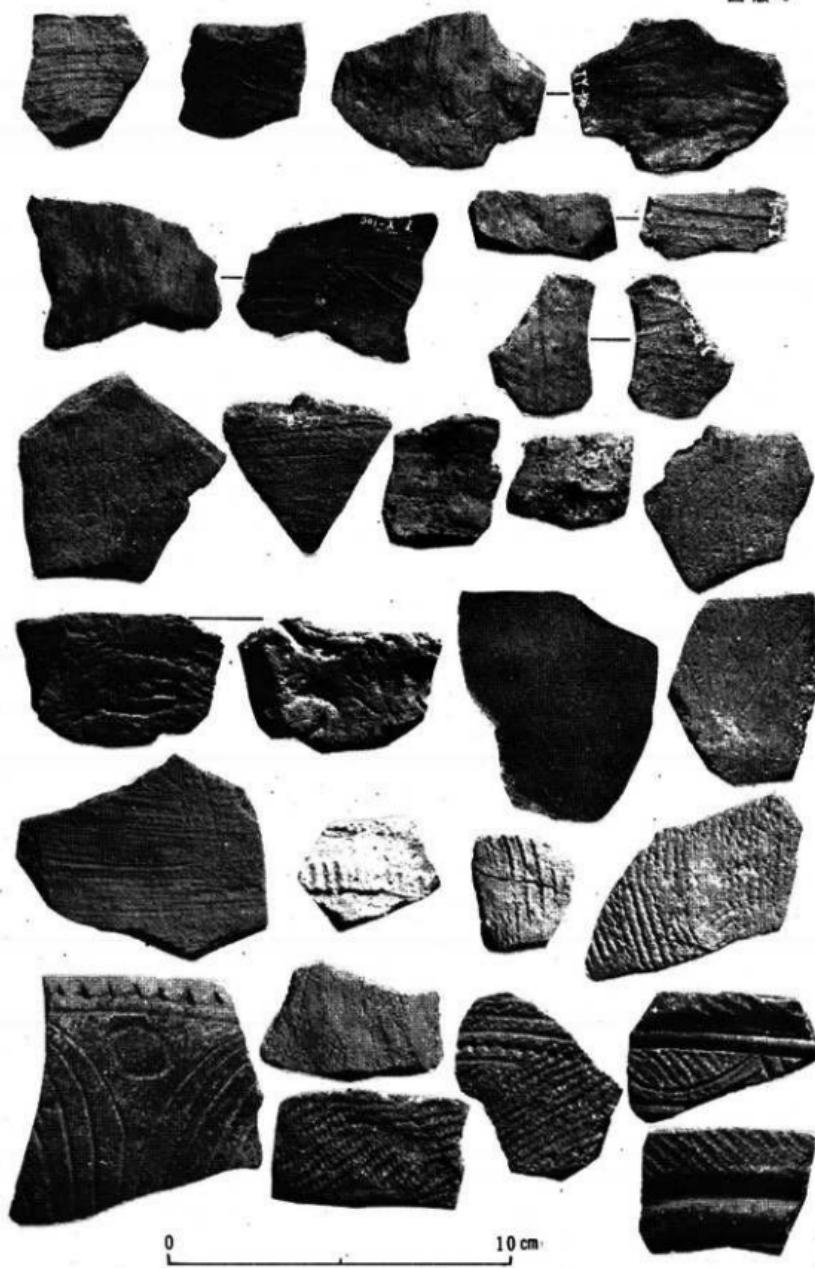
第3号 小豎穴



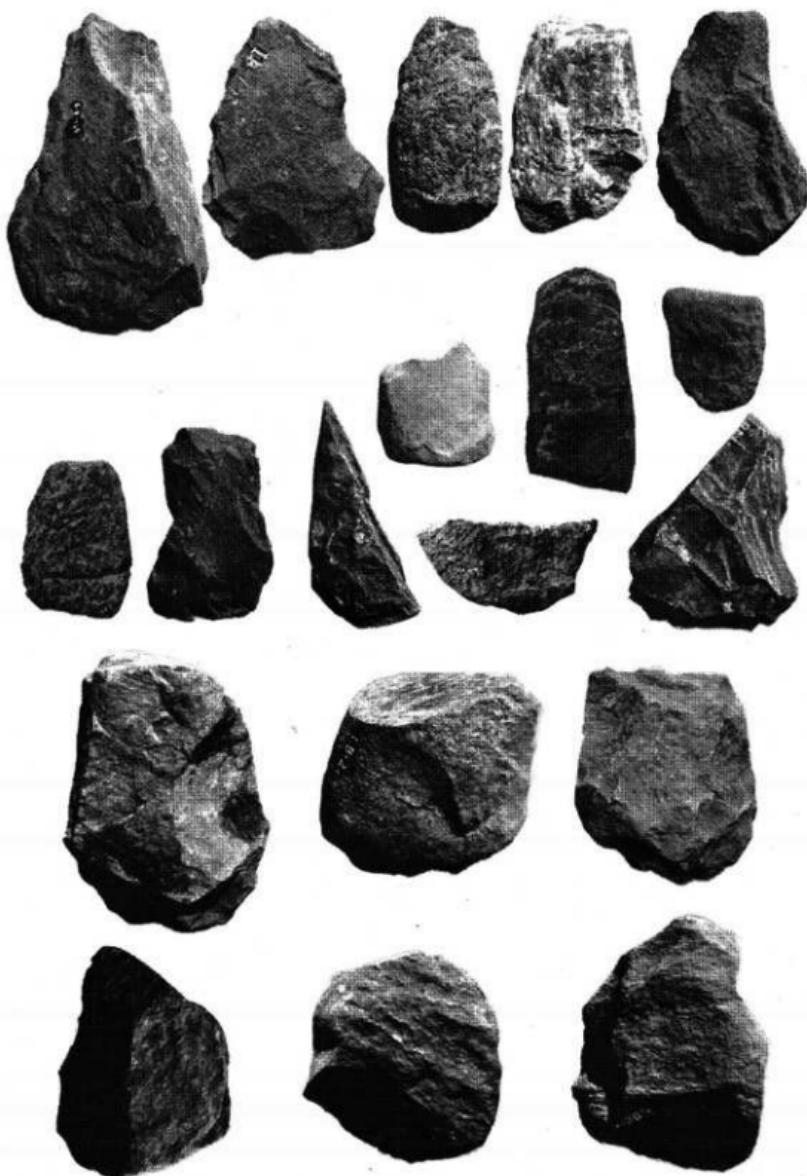
第4号 小豎穴



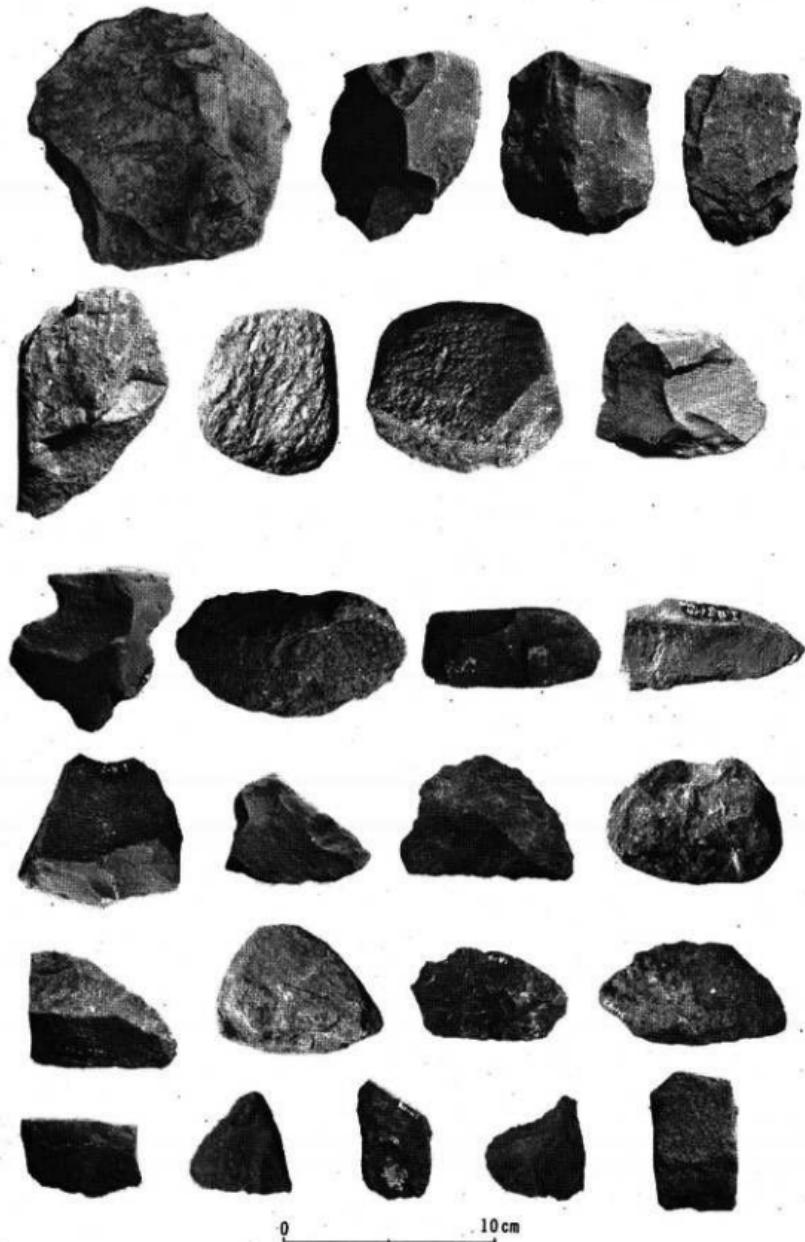


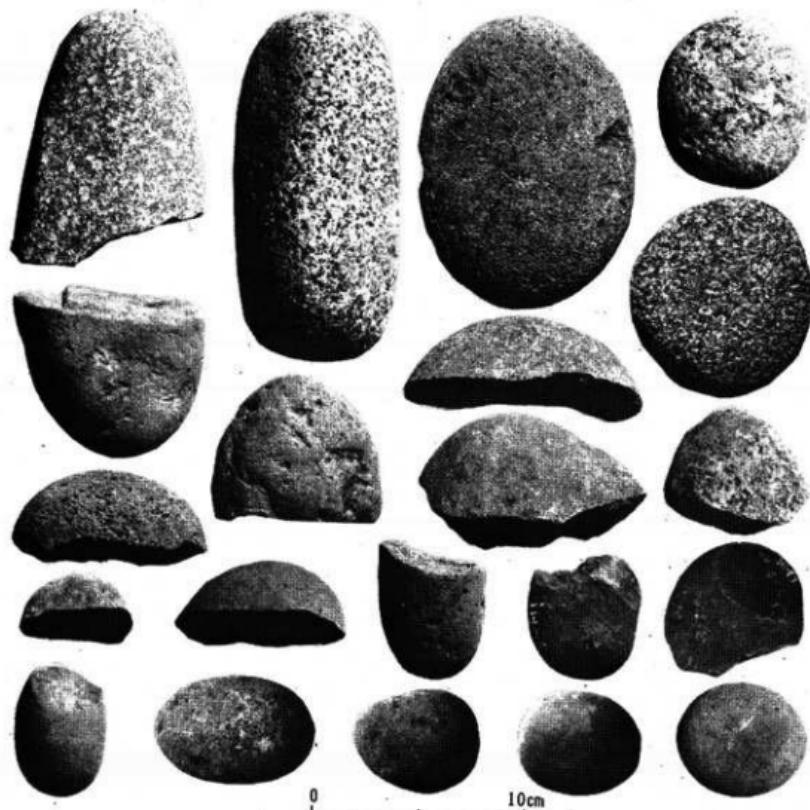






0 10cm





(上) 第1号小窓穴内出土のフレイク  
(左) 各区出土のフレイク



## 参加者名簿

国学院大学：伊藤光則 杉田 弘 田中純男  
日本大学：遠藤茂 奈良泰史  
立命館大学：小俣孝雄  
同志社大学：武川慎一  
東京経済大学：山田行輝  
駒沢大学：田中悟  
相模女子大学：小俣和子  
玉川大学：小佐野保子  
専修大学：川村真理

### 県立都留高校

阿部勝男	荒川清美	飯島章夫	石井よう子
石野明美	伊藤一男	井上直子	井上まり子
尾形忠	小俣直美	小俣三重子	小俣三千代
降矢利江子	勝俣博美	上條一雄	倉田陽子
小林親雄	小林春野	駒沢正江	佐藤敏子
清水ゆかり	清水由美子	杉本正文	鈴木英子
鷹取きよみ	田村貴美子	中村晴信	野沢和代
橋本光子	橋本やよい	畠山照美	東山隆司
平井かおる	藤本和美	藤本みさお	三井まり子
三井ゆりえ	望月千恵子	望月直美	安留春美

### 一般

高橋直博（下和田小数論）  
上條一男（都留高校OB）  
小林誠（　　）

## 山梨県大月市岩殿中倉遺跡調査報告

発行日 1974年3月20日

著者 大月市岩殿遺跡発掘調査団

発行者 大月市教育委員会

印刷 株式会社文伸印刷所

